

模様の欲望

テキスタイルのように自由に模様を操れないバスケットリーだが、それでも模様を生み出したいというのは本能的な欲望であるらしく、縄文時代からはっきりとその痕跡を認めることができる。(BN 3 4 号他参照)



模様を作るのによく使われるのがコイリング技法。この5つのネストバスケットは文字でルアンダのかごと主張している。トップ部分は芯材と巻材両方を黒。文字のところは巻材のみ黒、側面は別材を乗せて巻くという3種類の方法が取り入れられている。



材を染めて使えば、このサルディニアのかごのように、色もパターンも自由な表現ができる。

プレイティングでは、色を使わず飛び方を変化させると、地紋のようになる。うっかりすると見逃すことになるが、手はこんでいる。



違う色の材を使ってプレイティングすると、シンプルな模様から複雑なパターンまで飛び方の工夫次第。

東京都小笠原村の
タコノ葉細工
(BN 6 3 号参照)



かごの内部(裏側)は白黒逆転している。ということは、材料の片面だけが黒ということか。



2方向違う色で組む

ことは、様々な模様を可能にする。

これはボルネオバッグと呼ばれるインドネシアの背負い籠だが宗主国だったオランダの影響なのか、鷲の紋章のような柄が編み出されている。



トワイニングの場合も、目を詰めて編むと模様がよくわかる。このジンバブエの浅い皿型のかご、一時だいぶ日本で出回っていたが、模様がみんな違っていた。構造は同じだから一つあればいいのに、つい欲望が膨らんだ結果いくつも買うことになった。模様の魔力、恐るべし。

